

(資料 1) 東日本大震災被災者支援講演会の概要(前半;体験発表)

被災者 内海牧子さん (女性 60 代) 東松島市野蒜字亀岡

- ・自分は津波を見ていない。
- ・息子の嫁が死亡。探し回って、6 日後に遺体確認。そのことだけで皆さんのお世話ができなかった。
- ・夫はカーテンにつかまってかろうじて生き残る。
- ・最近、特に悲しみが強く感じる。
- ・それでも、「サンサンサン」というグループで被災した子供たちを支援する活動を行っている。子どもたちの笑顔に元気づけられる。

被災者 津田とも子さん (女性 60 代) 市大曲浜

- ・いち早く非難して、津波は見えていない。
- ・同じ大曲浜の人はたくさん亡くなった。
- ・民生委員だったが、津波のとき安否確認などしないで避難したのがとても気になった。
- ・それで、震災後何かしなければという気持ちが強く、身元確認の作業を手伝った。死んだ人の顔を覗くなどということは震災前の自分には考えられないことであったが、驚いたことにそれがしかりできた。
- ・仮設住宅で名簿作成や高齢者の手助けになるような活動をしている。
- ・避難した地域の皆さん、全国、全世界からの支援は本当にありがたかった。

被災者:武田政夫さん (男性 70 代) 東松島市野蒜字下沼

- ・最初に避難した公民館で津波に襲われたが、運よく九死に一生を得た。助けを求めて手を挙げながら濁流に吞まれていった人をたくさん見た。
- ・妻は行方不明のまま (遺体未確認)。
- ・77 歳。一人夕餉にむかうのは、やるせなく、寂しく、むなしくなる。妻とは最後を確認できない別れだったので、(位牌に?) 言葉をかけても返事が返ってこない。
- ・カナダから支援に来た 18 歳の孫娘のような子がとても心配してくれた。信じられないような出会いだ。先日、ネパールのカトマンズから励ましの手紙が届いた。本当にありがたい。

支援者 桜井あや子さん (女性、60 代) 東松島市大塩字表沢

- ・地域の避難所である大塩市民センターは、内陸部にあり、かつ新しかったので唯一無傷で残ったところでないか。
- ・最初、地区民も避難したが、すぐ、沿岸部からの被災者に明け渡し、地区民は支援者に回って、翌朝から暖かいおにぎりを出せた。
- ・赤ちゃんから要介護 5 の高齢者まで様々な人が続々と押し寄せた。・国道沿いにあったので、大きなトラックで支援物資がどんどん届いた。それらを捌くのもたいへんだった。
- ・現在、仮設に移った方々の支援を続けている。世間では「復興、復興」というが、回復の度合いは人それぞれである。その「それぞれ」を大切に支援したい。

東日本大震災被災者支援講演会第2部

講師：柳田邦男氏

司会（パーソナリティ）板橋恵子

司会 お待たせいたしました。ただいまから第2部を始めさせていただきます。

本日の講師、ノンフィクション作家、評論家の柳田邦男さんです。もう一度、拍手を。

柳田さん、よろしくお願いいたします。まずは、第1部で4人の方々のお話をお聞きいただきましたが、いかがでしたでしょうか。

柳田 そう長くない時間の中で、皆さんの胸に募る思い、本当に命の掛かった体験であるだけに、堰を切ったように貴重なご体験を話してくださいました。私も胸が詰まる思いでございます。災害の被災者や事故の被害者、さまざまな方々にお会いしたりして、それぞれに抱え込む問題は大変だなといつも思うんです。

でも、きょうお話しになった内海さんにしろ、津田さん、武田さん、桜井さん、それぞれに民生委員とか、仕事なりボランティア活動なりを通じて、人を支える、何かお役に立つということをやっている。そのこと自体が、ご自分を必死に支える。力がそこから出ていると。

人間というのは、一人だけでは生きられない。人というのは支え合ったり、極端に言えば、一緒に暮らすから生きられるということです。災害で本当に大事な人、特に家族、連れ合い、子ども、親、いろんな方を亡くすと、心の中にポツカリと空白ができてしまう。それから、「なんで自分は生きてしまったのか」「なんで自分が死なないで、彼女が先に逝ってしまったのか」と。先ほどもちょっとお話が出ましたが、こういう自責の念なり、贖罪（しょくざい）意識といったものを持ちがちです。戦争体験者の中に、特にそういう方が多いんです。飯盒（はんごう）の飯を分け合った戦友が、隣で敵の弾に当たって死ぬ。「なぜ俺に当たらないで、あいつに当たったんだ」って、生涯引きずるようなことがあるわけです。

災害の場合も同じです。同じ状況の中、今回は津波という大変恐ろしい状況の中で、流される、あるいは助けを求める。その側にいたということだけで、自分が生きていることが罪であるような思いになってしまうんだろうと思うんです。これは、いわば心の借財みたいなストレス。なかなか難しい問題だと思うんです。

ですが、その人が信仰するのが神であれ、仏であれ、あるいは何か天の大いなるものであれ、命というのは人知の及ばない大きな枠組みの中で決まっているのかもしれないなって思うんです。自分が助けられなかったから彼女が亡くなったとか、あの子が亡くなったとかいうことではなくて、運命というものの。ある意味で過酷であるし、ある意味で避け難いものである。そういう中で自分だけを責めると、なかなか前向きに生きられない。光が見えない。そういうところに落ち込んでしまいがちなんです。

ですが、私のような立場、あるいはカウンセラーもそうだと思うんですが、「こうすればいいですよ」とか、「こんなふうに考えたら」と言うことはできないんです。人間の心というのは、アドバイスを受けて「じゃあ、そうします」というように、簡単に方向付けや気持ちを切り替えたりはできないんですよね。やっぱりその人ののっぴきならない人生の文脈なり家族関係なりの中で、そういう思いになった。

どんな専門家であれ、それに関係のない第三者が「こうしたら」と言って、「あ、そうですね」というわけにはいかないんです。

自分自身の生き方でもあるんですけど、一つは熟柿（じゅくし）主義。柿の実が熟す。渋柿にしろ、甘柿しろ、ひとりでにポトンと落ちる時が来る。特に渋柿なんていうのは、色づいて、葉が落ちててもいつまでも残っている。これは日本の一つの農村の風景でもあるわけですけど、あの柿が熟して落ちるということはすごく意味が深い。とてもつらいことなんですけど、人間の心も時間が流れる中で、そういう時が来るんだらうと思うんです。ふっと、ある時気持ちが変わる。それはいつ来るかわからないんです。人によると5年後かもしれない、人によると1カ月かもしれない。

そこで一つ大事なことは、やっぱり人と接するということなんです。先ほどのお話の中で、仮設に140世帯いて、そのうちの40世帯くらいがお一人で過ごしておられると。その年齢も、比較的高齢な方が多いと。これはとてもリスクの高い生活だと思うんです。

どういうことかという……。もうずいぶん経ちましたけれど、1995年の阪神淡路大震災のときに、たくさん仮設住宅ができました。その中に、神戸の一番西の西神第7仮設という、1500世帯入っていた大きな仮設があるんです。そこは急ごしらえですから、緑一つない。砂漠にできた収容所みたいに、たくさんのプレハブ長屋ができたわけです。その4割が、結構お年の方。それも一人住まいの方が多い。その仮設ができてしばらく経ってから訪れたら、「ふれあいテント」という大きな青テントが建っていました。

一人住まいになると危ない。あの震災のときは抽選で入れたものですから、隣近所から切り離されてバラバラになって入っていた。周りは誰も知らない人。ますます状況が悪いわけです。そこで、ある病院の看護師長をやっていた黒田裕子さんとか、ボランティアの方が自腹を切って青テントを造った。「ふれあいテント」と名付けて、お茶やコーヒーやお菓子を用意して、テレビも用意した。いつでも来て、お茶を飲める、お話ができる。近所付き合いみたいなものを、その仮設の中で再構築しよう。

東松島のような地方と違って大都市ですから、ますますお互いのコミュニケーションというのが取りにくいんですね。孤立しがちなんです。そういう状況を見て、毎日そういう方をお招きしたり、あるいは見回りをして、「このお宅ちょっと心配だな」というときに（声を掛けた）。

どうやって声を掛けて、どんな状況になっているか、いろいろ話を伺ったんです。そうしたら、「柳田さん、あるお年の方に声を掛けてあげてくださいよ」って。お年と言っても、まだ59だったかな。広域火災が起こって、アパートが焼けて、仕事も失った。ちょっとの手当、社会保障みたいなのが出るとお酒を飲んでしまう。缶チューハイかビールを飲んで、ときどきラーメンを食べては、そのまま寝たきりという方。「本当に一人でボーッとしている。1時間でも、2時間でも、何かおしゃべりしてやってくれませんか」って言うから、「いいですよ」って一緒に伺ったんです。

おうちに入りましたら、せんべい布団に休んでおられた。枕元に空のラーメン丼があって、何も入っていないんです。缶チューハイの空けたのが1つあるだけ。ほかは何もないんです。これは生きられない……。

私、畳の枕元に座らせていただいて、それとなく雑談をしたんですね。取材とは違うんです。本当に普通の雑談をした。「どの辺にお住まいだったのか」とか、「ご家族はいないんですか」とか、あるいは毎日の生活とか。本当にとりとめのない話をしているうちに、1時間半くらい経ったのでしょうか。そうしたら、顔色が変わってきたんですよ。何の意味もない雑談だけれど、二日酔いみたいなことで青ざめ

て寝ているだけだった方が、だんだんに起き上がって、せんべい布団の上にお座りして、生き生きとまではいかないんだけどしゃべりだしたんです。それで、「ふれあいテントに行って、コーヒーを飲んだり、お茶菓子を食べたり。ボランティアの方でも近所の方でもいいから、おしゃべりするっていいことなんですよ」ってなことでお別れしたんです。それが、午後1時か2時くらいだったんです。

（それで、）ほかのところにお伺いしたり、いろいろと取材したり。夕方、そこから300メートルくらい離れた別なお宅にお寄りして出てきたら、彼にバッタリ会ったんです。外に出るなんて、「えっ！」って僕のほうが驚いた。夕方だから「散歩しているんですか」って言ったら、「いやあ、いつもは出る気もないけど、何だかきょうは歩きたくなかった」って言うんですよ。「いいじゃないですか！ とにかく体を動かしたり、歩いたり。テントに行ってお茶を飲んだりでもいい。そのうち何かいいことがあるかもしれないから、外へ出ましょうよ」って、まずは別れたんです。

それで、ずっと被災地を取材していて、数日後に焼け跡に行ったんです。焼け跡の真ん中に教会があって、そこがボランティアの拠点になっていた。僕もそこを拠点にしてあちこち動いていたんです。そうしたら、焼け跡に彼が立っていたんですよ。仮設からその焼け跡まで、地下鉄でも結構距離があるんです。びっくりして、「まあ、よくぞ来ましたねえ！ きょうはどうしたの？」って逆にこっちが聞いたんです。そうしたら、「いやあ、外に出たら、住んでいたところがどうなっているか見たくなくて」なんて。それで、30分くらい立ち話をして、「何ていうことなくても、そうやって出歩くっていいですよ」って言ったんですよ。

それが最後だったんです。黒田さんなんかも本当によくケアしてくださって、1年くらいはそんなのでブラブラしていたんですが、ちょうど1年後くらいだったようです。あとで知ったんですが、心臓発作を起こして亡くなられてしまったんですね。

阪神淡路大震災のときに、仮設で一人で亡くなった（方は）255人いるんですよ。当時、孤独死と言っていました。これは大変なことだろうと思うんです。ボランティアの方々が一生懸命に見回りをしたり、声掛けをしたり、あるいはテントを張ったりしていろんな催しをやっている、そういうふうに取り残されてしまう人がいるんです。

でも、そういう中からボランティアの方々が一つ気づいたことがある。例えば、「花火大会をやりましょう」なんていうと、みんなゾロゾロ来るわけです。そういうところに出てきた人は、言うならばそれでもう合格点みたいなもの。そこで盛り上がるのはいいんです。自分で動こうとする意志がある。そういうところにも出られない人こそが大事。こもってしまった人のほうが大変。そういうときに、ボランティアの方々がそういう人の見回りや声掛けをするのを忘れてはいけない。

その年のクリスマスでした。青テントが、今度は小屋になりました。市のほうで200万ほど出した。陳情を受けて200万出して、木造の小屋にしたんですね。しっかりして、暖房もよく取れるようになった。そこでクリスマス・パーティをやったらたくさん集まったんですが、やっぱりボランティアの何人かは来られない方のお宅に（行った）。本当に小さいお菓子の包みだけれど、プレゼントを持って1戸ずつ声を掛けていったんです。

これは発見だと思うんですね。それから何年かあとに新潟県中越沖地震があって、そこで育ったボランティアの人がリーダーになって現地に行ったんです。そのときも、ちゃんとそれをしていましたね。お祭りみたいなことは若い人に任せて、リーダー格の者は一番心配な方のところに行って声掛けをする。

先ほどの話で、武田さんがカナダの18歳の娘さんにもものすごく支えられたと……。

司会 ええ、エリザベスさん。

柳田 専門家である必要はない。温かい心の通じ合いがあるような出会い、あるいは訪れてくれる人、死ぬか生きるかの本当に厳しい状況を体験したり、その混迷の中にいる人にとって、それはものすごく大きな光なんです。日常生活の何事もないところで、例えばフランスからかわいい女の子が来て声を掛けられたら、「かわいいねえ」なんて楽しむだけなんです。それが、自分が生きる道も失ってしまったような中だと、真っ暗闇の中にお灯明が1つともされるような、すごい力を持つんですよね。そのことは、ほかの方々の話の中にもいくつか出ておりました。

桜井さんがおっしゃっていた中で、「たくさんいる中で、お一人お一人みんなわかるわけがない」と。それはそうだと思いますよね。心の中に持っているものというのは、カウンセラーが1対1で聞いたって、そうすぐにわかるものでもない。まして、ボランティア活動をやりながら、あるいは民生委員とか、児童委員とかをやっている。避難しておられる方々一人一人が、どんな問題を抱えて、いま何に悩んでいるとか、生きようか死のうか思っているとかは見えないわけですよ。それに対しては、やっぱり謙虚でなければいけない。知ったかぶりしない。桜井さんがおっしゃったけど、そういう声なき声みたいなものを少しでもわかろうとする努力。これがとっても大事だと思うんですね。

司会 柳田さんがおっしゃる熟柿主義。柿の実が熟して落ちる。そういう時の流れの中にも、温かい人がかかわるということがあるのとないのとは、大きく違うということですよ。

柳田 そうですね。

人間というのはさまざまで、悪巧みをする人もいるし、本当に真っ白な気持ちで支え合うような人もいるし。いろいろなんですけれど、そういう人を区分けしても始まらない。支えるというのは、逆を言うとか実は支えられていることでもあるんです。1対1なり、1対3だったり、いろんな形があると思うんですが、とにかく人と人が触れ合うということ。

「あ、いいな」と思ったのは、さっき津田さんが「1鉢の花を植えて、その花を話題にして通りかかる人と声を交わす、あいさつをする。そうすると、中には立ち止まって話し込む人もいる」と。触れ合うときに、これがすごく大事なんですよね。

司会 そうですよええ、負担にならない状況で会話ができるんですね。

柳田 そうです。病院にお見舞いに行くときに、お花を持っていく人は多いですよ。そういうときに、そそくさとその辺で（買った）西洋の切り花か何かを持ってただ形だけであげるのではなくて、何か思いを込める。小さな1輪でも、そこに何か思いを込めて持っていったりすると、それが話題になるんです。

例えば、春先、4月のまだ薄ら寒いころは勿忘草（わすれなぐさ）っていうのがあります。10センチもないくらいの小さいもので、白い花が咲いている。一部、紫もありますけれど、その鉢植えになっているものを持って、ガンが進行した友人のところへお見舞いに行ったんですね。彼が「かわいい花だね。それ何？」っていうから、「意外に知られてないんだよね、勿忘草。みんな耳からは知っているけど、

これが勿忘草だとすぐにわかる人って意外に少ないんだよね」なんて言うわけ。「勿忘草」のドイツ語は、フエアギスマインニヒト (Vergissmeinnicht) っていうんです。英語で言うと、フォーゲットミーノット (Forget-me-not)。「私を忘れないで」、これ1語なんです。つながっているんです。その話をすると、「病気どう?」「きょう、どう?」なんていう話をするよりは、友達と話が盛り上がってくるんですよ。「そうだよな、戦前、『忘れな草』っていうドイツの映画があって、あれ良かったよな」なんて話になると、病気のことばかり考えている気持ちがふっとほぐれるんですね。

そういう一つのもの、花に限らず何でもいいんです。僕は、最近をよく絵本を使うんです。「使う」という言い方はちょっと変ですけど、特に病気であまり動けなくなってしまったとか、お年であるとか。そういうときに、懐かしい絵本とか。本当に何でもいいんです。誰でもが知っているような絵本。あるいは、ちょうど彼に合うかなみたいな絵本を持っていく。絵本なんか持っていくと、最初は「何? 絵本?」なんていう顔をする。だけど、意図的にそれでお説教するんじゃなくて、「まあ、いいから聞いてよ」なんてことで押し売りみたいにして、もう 60、70 の友人なんかに絵本の読み聞かせをやるんです。

司会　へえ、すてきですねえ。

柳田　そうすると、だんだん読んでいくうちに、引き込まれるんですね。

絵本というのは、皆さん、子育てのときにだいたいやりますよね。子どもと一緒にソファに座るなり、寝そべるなり、時には抱っこしながら、スキンシップのある中で見る。絵本というのはフィクションの世界なんだけれど、子どもはフィクションと現実との境目がありません。国境がありません。ですから、スキンシップがあって、お母さんなりお父さんなりが肉声で感情を込めて読んでいると、そこにある世界が現実世界になる。その中に自分が入っていくんです。ですから、実体験に近いような感動になり、面白おかしく笑ったりするんです。

それは子どもだけかということ、そうじゃない。病気なんかをしているときって、ものすごく感性が過敏になったり繊細になったりしているので、幼少期の本当にナイーブなみずみずしい感性が戻ってきているんですよ。その証拠は涙もろくなったりとか、ちょっとした詩や俳句に感動したりとかする。普段、忙しくて商売のことばかり考えているとそんなことないのに、病気をするとちょっとした俳句なんかでも心動かされたりするんですよ。

話を戻します。そういうふうに、やっぱり人というのは触れ合うことが大事なんだけれど、手ぶらで行って「何を話そうかな」とか、あるいは計画的に「カウンセリングしてやろうか」なんて思ったら、これは全部失敗します。そうじゃなくて、本当に対等の立場で。「自分だって弱い人間だ」という謙虚な気持ちで、さりげない日常会話をする。そういうときに、花1輪が添えられるとか、絵本があるとか。あるいは、何か思い出話をする。つまり、幼少期が一緒に幼なじみであれば、そういう幼いころの話をするとか。そういうことです。

人間の心が平安を保てるとか、いつも大きなぶれがなくいられる一つの大事な要素は、その人に「心の故郷 (ふるさと)」があるかどうかということなんです。「心の故郷」というのは、とても意味が深い。どういうのかというと、一つは母親との関係。ものすごくうまくいっていて、優しく愛された。抱きしめられ、いつも全部受け入れてくれたみたいなものが一つ、真ん中にある。それだけじゃなくて、生ま

れ育った家、家族、言葉のなまり、そして周りの風景、友達とか。いろんなものが凝縮されて、記憶の一番古いところ（にある）。大地の地層で言えば、石炭紀か恐竜の時代。そういう古い地層に相当するように、心の地層の一番深いところにあるんです。それがいい形であると、振り子が揺れてとんでもないところに行ってもちゃんと戻るところがあるのと同じように、例えばうつ病になってしまったりとか、パニックになったりとか、ものすごくヒステリックになったりとかしても、心が戻るところを知っている。

だけれど、いまの時代は、子ども時代に虐待を受けたり、ネグレクト、あるいはとんでもない不幸な災害があつて、とてもつらい体験がここの真ん中にドシンとできちゃう。そういうときは、下手をするとい生の人格のゆがみさえできてしまうようなことになるんです。

50年か70年か経って、難病とか老衰とかいう中で「自分の人生はもう終わりだ」なんて思つて悶々としている。そういうときに真ん中にいいものがある、そういう経験を揺さぶられると、自分自身が生きているということに対して肯定的になれる。どうやればいいかという、一つは傾聴ボランティアというのがあります。聞いてあげる。これを本格的に、ちゃんと訓練を受けた人がしっかりと聞いてあげる。1回1時間ぐらいずつ、1週間に1回とか2回、人生一代記を聞いてあげるんです。あまりせかさなくて、思い出すままに生まれ育ちから、乙女時代だったり、青春時代だったり。そうすると、不思議なものです。何回目かぐらいには、「ああ、そういえば自分にも楽しい小学校時代があつた」とか、「友達と一緒に山登りをしてどうだった」とか。いろんなものが髣髴（ほうふつ）とよみがえってくるんです。普段、まったく忘れていたことがよみがえってくる。それを何回も続けていく。

人間っていうのは、お魚屋さんであれ、八百屋さんであれ、サラリーマンであれ、人生の中には山あり谷あり。本当に川の流れのように、紆余曲折があるわけです。何回もやっているうちに、その中のエピソードがプツ、プツと出てくるんです。人間はどんな人でも、一編の大河小説のような内容を持っている。日ごろ、振り返っていないだけ。それを進んでいくと、「私の人生もまんざらつまなくもなかった」と。「つまらない人生だ」「つまんない一生だ」「このまま彼の世に行くのか。納得できない」みたいに思っていたのが、だんだん変わっていく。「いや、自分もまあまあの人生だったんだな。あのときつらかったけど、よくやったよな」なんて、自分を許したり、肯定的になったりするんですよね。そういう方法もある。

それから、そこまで本格的にやらなくても、本当に身近な友達とか家族が話を聞いてあげたりする。

あるいは、懐かしい絵本なんかを読んであげる。それも、その人が知っているもののほうがいいんですよ。「こんな、5歳、6歳のときに読んだものをいまさら」と思うかもしれないけど、実はそれが大事なんです。懐かしみの感情が揺り起こされるということ。専門的な哲学の研究もあるんです。これは人間が生きているという実感を取り戻すうえで、ものすごく大事なんだそうです。読み聞かせているうちに、何となく不思議な感情が湧いてくる。自分でも説明できないような、ウルウルしてくるような、何か普段と違う……。

僕ね、ものすごく難病の進行した患者さんとずっとお付き合いしていて、あるとき絵本を持って行つたんですね。それで、読んであげたんです。さりげないものを持って行って、「どうですか？ つまんなかった？」とか何とか聞いたら、「何か変な感じ……」っていうんですね。「変な感じ」っていうのは、自分の心がしっとりとしてきて、説明がつかないような、不思議な、ふわーとした気持ちになつたらしいんです。そういうのを続けていくといいんだろうなって思いましたね。それで、次に行つたと

きもまた読んであげたんです。あるいは、さっきのように花1輪で話題をつくって盛り上げるとかね。

司会 ただ、今回の震災では、思い出の中にあるその故郷の光景までなくなってしまったところが多いぶんあります。実は、3月11日が近づいて、津波に対する恐ろしさから学校に来られなくなっている子どもたちがいるそうなんです。会場の皆さんからのご質問で、「そのことに対してはどう対処すればいいですか」と。これはおそらく学校の先生ではないかと思われます。

いまは明るく振る舞っていても、押し込めている感情なり恐怖心なりが、子どもたちの心の中に相当渦巻いていると思うんですね。それがこの先どういう形で出ていくのか。そこが本当に癒えることがあるのかというのは、親御さんなり、先生なり、皆さんが思っていることだと思うんです。そこはどうでしょう、子どもたちに対しては。

柳田 とても難しい問題ですね。

震災の直後、福島県郡山のある小児科医がものすごいリーダーシップを執って、子どもの心のケアにかかわる人たち、市の教育委員会も、学校の先生も、幼稚園・保育園の教師や保育士、それから児童館の人、ボランティアの読み聞かせグループの人、小児科医、精神科医、あるいは臨床心理士とか、あらゆる関係者が全部集まって、200人くらいのプロジェクトを立てたんです。私もお付き合いがあったものですから、東京から専門家の応援団が行くときに、「作家としてできることは何でもお手伝いしましょう」というので行って（一緒に）立ち上げたんです。

なぜ集まってやったかという、みんながある意味大きな目標意識を持つ。基本的に何をしなければいけないのか、基本的にまず何をわきまえなければいけないかという、共通認識を持つためにやったんです。いろんな心の問題を子どもが抱え込んだときに、どうするか。そういうケアは、長年いろんな事例でやってきた先生が必要になってくると。

震災から1カ月で、子どもたちがPTSDになる前です。恐怖とか喪失感とか、心にいろんな不安な要素ができて混沌（こんとん）としているわけです。それがだんだん沈んできて、5、6カ月くらい経つといろんな症状になる。それがPTSDです。外傷後にできる心のゆがみだったり、病気だったりするわけです。そうなる前に取り組む必要があるというので、急いで立ち上げたんです。

でもね、世の中の人には意外に（知らない。）お医者さんでも知らない人がいる。「PTSDなんて言うけど、あんなものは半年くらい経たないと表れないよ。いまずぐやるようなことじゃないよ」なんて言うんですね。それに対して、本当に専門的にやっている人は、「そんなことをやっているからダメなんだ」って。PTSDの症状が出てからでは手遅れと言っているくらい。そうなる前に取り組まなければいけないというので、始まったんです。3月11日に1年間を振り返って、郡山でいろんなイベントをやります。

子どもたちの心を解放するには、何と言っても遊ばせなきゃだめ。思う存分遊ぶ。友達と一緒に遊んでけんかもすれば、仲良しにもなる。そういうことをやる必要がある。ところが、こちら宮城との根本的な違いは、放射能汚染があって、子どもが外で遊べない。これは最悪なんです。そこで、一生懸命に運動した。そうしたら、大きなショッピングセンターが不景気で閉店していて、そこのオーナーが何と1900㎡ある元ショッピングセンターを全部提供してくれた。屋根付きのそこを全部、子どもの遊び場にした。砂場もあれば、子どもが走るところもあれば、いろんなものがある。それから、絵本の読み聞か

せコーナーも造って、12月にオープンしたんです。そういうことも一つ生んだんです。

これは何を意味しているかということ、心に傷を持ったり、いろんなトラウマを抱えてしまったときに、それを開放してあげる。子どもの場合は遊ばせるとか、しっかり抱きしめてあげる。

子どもは抱きしめるということが、一番大事なんですね。最近は子育ての中で早く自立させるということで、早いところ離乳食に移して、あんまり抱っこしないというおかあさんがいるらしいですよ。これは大問題。乳幼児精神保健をやっている、慶応大学の渡辺久子先生という専門家の方がおられるんですが、その方の名言は「心のへその緒は3年切れません」と。つまり、おかあさんに抱っこされたり、おかあさんの温かい肌（に触れ）、温かいおっぱいをしゃぶる。これが続けば続くほど、その子は安定した人格形成ができて、あるときパッと自立する。ところが、早く自立させようと思って早く突き放すと、いつまでも自立できなくて、生涯、親を困らせるようなことになるので、これが言われるんです。

とにかく、大事なことは抱きしめるということ。それは子どもだけじゃないんですよ。大人だってそうなんです。50になったって、60になったって、自分が認められて、愛される。（本当に）抱きしめられなくても、包まれる気持ちになれば同じなんです。

それで、僕、被災された方で心を割って話せるような何人かの女性に（聞いたんです）。もう60を過ぎですから、聞いてもいいなと思って「あなた、何歳までおかあさんのおっぱいしゃぶってた？」って言ったら、「3歳まで」とか、「2歳まで」とか。昔はそうだったんだなって。つまり、お乳が出なくなってもやっていた。いま、このつらい中でも非常に安定した温和な人格、性格でいられるのは、それじゃないかなと思うくらいです。これは専門家の方も肯定的に言うんです。

それは子どものころの愛され方です。ただ、さっきおっしゃったみたいに、おかあさんを亡くした、あるいは家も町もない、戻ることもできない。これは大変深刻な問題です。津波の場合も、原発の汚染の問題も共通です。特に汚染なんていうのは、将来どれくらい続くかわからないという問題ですから。

とても難しいけれど、そういうときのひとつ道は……。例えば、いま宮古になっている田老町。昔の人が何度も津波の被害を受けたときに、津波が来ない山のところに町を移したんです。でも、戦後の経済成長や若い人（の考え）で、どんどんまたそこに住むようになって、被害を受けるようになった。これは田老だけじゃなくて、（ほかも）同じです。

昔やった、新しい町をつくるということ。それは何を意味するかということ、（決断するということ。）また災害が来て、同じ悲劇を生む。どこかでそれを断ち切るには、決断して自分たちの力で新しい故郷（こきょう）をつくる。これはものすごく無理な注文ですよ。（無理な）注文なんだけど、それができたら最高だと思っているんです。どういうことかということ、50年後、100年後を生きる世代が、「おじいちゃんたちの世代、ひいおじいちゃんたちの世代はつらかったろう。家を失い、町へ帰れない。大変だったろう。だけど、こういうところに新しい町をつくり、住まいを造った。次の世代を生きる人が安心して住めるような故郷を、よくつくってくれた」と。つまり、「いにしえの故郷」ではなくて、「未来の故郷」をつくる。理想論かもしれませんが。それを頭の中に描きながら、100%それができなくても、何とかそれに近づくような方向でやる。そのためには政治も行政も動かなければいけないし、何と言ってもそこに住んでいる人が何かの決断をしなければいけないんですよ。

司会 柳田さんは、まさに政府の原発事故調査検討委員会のメンバーでもいらっしゃいます。これも会場からですが、「東電の原発担当者は、なぜ刑事責任を問われないのか」というご質問が来ています。

これは震災ではなく人災です。委員のお一人でもいらっしゃるの、これについてはどういうお考えをお持ちですか。

柳田 いま、原発の大変な災害になった。その災害の原因は大きく2つある。2つとは何かというと、原発のプラントを造る設計をどこかでごまかしていた。もう一つは、万々一事故が起こって放射能がまき散らかされたときの（防災体制。）大変な被害が起こる。それを最小限に防ぐための防災体制を組む。この2つの局面があるわけで、2つともダメだったんですね。

どういうことかということ、プラントのシステムを、どんな地震や津波があっても大丈夫なように造る。もっとほかの原因もあるかもしれない。場所によると洪水とか、とんでもない低気圧の暴風とか、テロとか。いろんな要素があります。こういうのを外的要因というんです。そういうものに対して備えをしていたのかということ、何にもしていなかったんです。

最近、平安時代の貞観津波というのが有名になりました。それから、江戸時代初期の慶長年間の慶長津波というのがある。この2つは、明治津波や昭和津波よりはるかにスケールが大きい。三陸津波と一口で言われる昭和8年、明治29年のものは、震源域がそう広くない。だから、近い三陸だけがものすごい大津波になった。福島のほうは免れたし、宮城平野のほうも比較的免れた。慶長の津波と貞観津波というのはそうではない。スケールが大きい。震源域が北から南のほう（まで）、具体的には三陸沖から茨城沖ぐらまで。連動型といって、マグニチュード8以上のものが3つ同時に起こるような形だったというふうな研究が、20年も前から始まっていたんです。それがほとんど間違いないと。地質調査をしたり、そこに残った遺跡を調べて、大変なものだったということがわかってきた。2000年代に入って、5、6年ごろにわかってきたんです。

ですが、それをやったら福島原発の防災対策を根本的につくり直さなければいけないわけです。どうするかって、堤防を高くすることと、仮に津波の水が入ってきても（大丈夫なようにすること）。

電気というのは、濡れたら終わりですから。予備電源のディーゼル発電機が水をかぶって動かなくなったということばかり伝えられていますけど、もっと重大なのは配電盤。いわば心臓みたいなところです。体中に血液を回す。つまり、プラントの中の全部、コントロールルームから原子炉から、あるいは発電機から、すべてのところに電流を送っている。その一番の配給元が配電盤なんです。その配電盤が、水が来たらたちまち濡れてしまうようなところに造ってあった。1階とか、地下とか、すぐに水をかぶってしまうところに造ってあったんです。

じゃあ、どうすればいいか。そこを機密性のある部屋にすれば、水をかぶっても何とか持ち堪えるわけです。十数メートルの津波が来て建屋が全部水に埋まっても、そこに水が全然入らないようにしていれば配電盤は生き残るわけ。そうすると、仮に予備電源が切れても、水がひいたあとにほかから電源を持ってきて配電盤につなげば、まだ配れるということなんです。

それもしていなかった。つまり、システムをつくる上で、やるべき万一に対する備えがなかった。なかったというのは、知らなかったんじゃないくて、わかっていたけれどそれをやるとお金がかかるから、「そういうことはないことにしよう」と。津波学者が「とても大きなものが来る恐れがある」と言ったら、それができるだけ学界全体や行政の中で認知されないように潰す。「まだ証拠が足りない」とか、「学問的に多数を取っていない」とか。あるいは、「政府の地震津波の専門委員会の中で、まだ公認されていない」とか。

司会 いろいろ理由を付けた。

柳田 何だかんだ、何回も何回も、何段階にも渡って、それが取り入れられるのをブロックしてきた。昔、植木等の「そのうち何とかなるだろう」という歌がありましたけれど、そういう感じだったんです。悪意であったか、善意であったか、無知であったか、それはわからないんですけど、少なくとも専門家は「そこをやらなければいけない」と。本当に起こったら大変だから、起こったときに住民に被害を与えない（ようにするとか、）避難態勢をしっかりとるとか。せめてそれくらいやれば良かったのに、それもやらなかった。つまり、「原発事故は起こらない」という結論が先にあった。「起こるか、起こらないか」じゃなくて、「起こらないんだ」ということが前提になっていた。

例えば、2007年に新潟県中越沖地震というのがあった。柏崎原発がものすごい震度で揺れて、いっぱい壊れて火災を起こしたんです。当時考えられていた防災対策が裏切られた。「そんなことはないはずだ」と、裏切られた。新潟県としては、今後また同じようなことがあって、もっと深刻なことが起こったら大変だと。泉田知事が陣頭に立って、原発事故に対する防災訓練を計画したんです。

どういう計画をしたかという、地震と原発事故が同時に起こる。つまり、巨大な地震が起こって、いっぱい被害が出る。道はズタズタになる、通信は途絶する、停電は起こる。そういう中で、原発も被害を受けて事故が起こる。こっちから放射能が漏れる。地震災害と放射能災害が同時に起こる。これを複合災害と言うんですが、それを前提にした訓練を計画したんです。

そうしたら、政府の原子力安全保安院が「それはしちゃだめだ！」と言って、行政命令で止めたんです。なぜかという、そういうことをすると、原発があたかも事故を起こすような危険なものという誤解を生むから。「それはやってはならん」と。それで、地元は何をやったかといったら、結局、豪雪にした。地震でみんな壊れるより、ちょっとましなわけです。「豪雪で車が思うように動かないときに原発事故が起こったらどうするか」という、それが精いっぱいできたこと。つい数年前のことです。

これの象徴的なことを、双葉町の町長さんが言っていました。原発の基地は双葉町と大熊町にありますけど、（町長さんは）若いころ、70年代、第一原発が造られ始めたときに技術者として働いていたんだそうです。働いていると、年中いろいろなトラブルがある。「原発って大変だな」と思っていた。そのうち（そこを）辞めて、議員になって、やがて町長になったわけです。町長になって、あまりにも日常トラブルが多い。今世紀に入ってから、「情報公開しなさい」と。「立地自治体としてどうなっているか知らない」と不安だから、すべて情報を出しなさい」と言ったら、毎日のようにファックスで「こんなトラブルがあった」と来るんだそうです。これであるとき本当にバーンと何か大きなことになったら大変だから、「訓練をやりたい」と言った。そうしたら、「そんな必要ありません。事故はないんです」って。「だったら、形だけやらせてください」というので、（原発）周辺の数百人くらいを対象にして、儀式的な避難訓練をやって終わりだったんです。原発事故っていうのは、いったん起こったら何十キロの範囲に及んで、何十万人という人が避難しなければいけないわけですか、ちょっとやそっとじゃだめなんですね。

司会 そうですねえ。事故が起こる、災害が起こる。そういうことがきっかけになって、社会が抱えていた問題が浮き彫りになってきますよね。よもや原発も、これほどいいかげんに行われてきたエネルギー政策とは、私たちは誰も思っていなかった部分があった。福島のみならず、ここ宮城も今後の放射能

の検査いかんによっては、さらに苦しみを抱えなければいけないような状況にもなってきます。

柳田 子どものケアにかかわっている臨床心理士の方、あるいは心療内科の先生方のお話を聞きますとね、「表には出ない」と。子どもたちは学校に行ってはしゃいでいるけど、心の中では大変な問題を抱えている。特に岩手のほうですと、三陸津波でおとうさん、おかあさんを亡くしたという子どもたちが、盛岡とかいろんなところで避難生活をしているわけです。そういうケアに当たっている先生方に聞くと、「本当に大変です」って。それを保護する親なり、何かの立場に立っている人が一体になってやらないと、「子どもの将来が大変です」と言っておられるんですね。

司会 そうですねえ。間もなく1年を迎えますけれど、被災地にいると、いろんな意味でまだ復興のスタートラインにすら立っていないのではないかと感じます。

あまり時間もなくなってきました。今回のチラシに、柳田さんが書かれた『生きなおす力』の抜粋を掲載させていただきました。最後に、その「生きなおす力とは」ということをお伺いできればと思うんです。皆さん、さまざまな体験をなさった。ここからどういうふう to 生きなおしたらいいだろうか。茫然（ぼうぜん）となさっている方も、まだまだ多くいらっしゃると思うんです。その方々に、ぜひメッセージをいただければと思います。

柳田 先ほど内海さんが、「高齢者が一人だけで仮設やらどこかに住んでいる。それがとても気掛かりだ」とおっしゃっていましたよね。まず、運動不足になって、それが気持ちまで運動不足になってくるということにつながりやすい。それから、津田さんがおっしゃった「マイナス思考に陥りがちだ」と。これをどうしたらいいだろうかという問題があるんです。普段、災害がない段階でも、そういう問題を抱えている方がたくさんおられる。いまの日本の状況というのは、災害によってよりそれが鮮烈に、強烈に表に出てきてしまったということだと思うんです。まったくなかったものが表に出たんじゃなくて、日ごろからあるものが表に出てきた。日ごろでさえも、そういう方々のケアの体制というのはとても難しいんです。

ただ、今回は災害という国家の重大事だということで、自治体とか国とかが心のケアに対してできるだけ応援しようと。100点は取っていないにしても、医療体制について少しでも支援体制を組めるようにしようと。そういう端緒は出ているんですが、被災者のスケールの大きさ、人数の大きさから比べるとまだまだ不十分ですよ。

でもね、阪神淡路大震災以来いろんな経験をしてきた中で、専門の方々はそういう取り組み方のノウハウを蓄積しているんです。そういうノウハウを生かすためには、地域ごとにいろいろな関係者が集まって、いろんな体制を組んでいく。東松島でこういうイベントをやる。宗教者や医療者、いろんな方が一緒になってこういう催しをなさる。あるいは、心の相談室のようなものをつくる。きょう（のイベントの）中心になっておられる名取市の岡部健先生も、心の相談室というのをつくっている。被災者、被害者に対して、できるだけ明かりが見えてくるような方向に支え、取り組もうとして、実際にやっておられます。

そこで、私が新しい傾向として注目しているのは、宗教者がかなり動きだしたということです。人間の心の一番奥底にあるもの。何宗とかいうよりも、もっと原点の、宗教心みたいなものを誰でも持って

いると思うんです。そここのところまで触れるような取組じゃないと、この悲惨な経験を乗り越えるための助言者なり、カウンセラーなりとしてかかわり合うのは難しいと思うんです。もちろん一人一人個性があって、抱えている問題も違うんです。そういう人々の話に耳を傾けたり、何かの形でケアにかかわろうとするときに、心が通じないと全然話にならないわけです。ただ、マニュアルどおりに何かをするというのではダメです。そういうときに、本当に人間が原点から持っている（もの）。例えば、東北地方で言えば、農家の方が古くからのお地蔵さんを大事にするとか、先祖を敬うとか。そういう原点、原始的なと言っていいような宗教心みたいなものまで視野に入れながら取り組まないと、この大災害の中での人々の立ち直りというのは難しいかもしれない。

そういう意味で、宗教者がもっともっと社会的に登場していいんだと思うんです。今回、この中心になったメンバー（には）、キリスト教（の方）も仏教の方もおられる。鎮魂の行脚なんかで被災地を歩かれたというのも、仏教の方だけじゃなくて、キリスト教の牧師さんも一緒になってやった。そういう新しい動きはとても大事だと思うんです。日本が、あるいは日本人がもう一度生きなおすために、原点に帰る。あるいは、根源的なものに帰るような気持ちじゃないとね。

司会 心の相談室では、今後も先ほどの金田さんが中心となって被災地を訪れる傾聴喫茶を行ってまいりますし、電話相談もお受けしているんです。一步踏み出していただいて、誰かとかかわる。誰かに話を聞いてもらうということ、まず第一歩としてやっていただけると、そこから突破口が開けるかもしれませんね。

柳田 それと、若い人。高校生とか、大学生とか。そういう方々が積極的にケアワークの応援団になったり、自分でもやったりするというのはとても大事だと思うんですね。

私ね、福島県のある山間部の小さい村で、子どもたちの読書活動、絵本活動のアドバイザーをずっとやっているんですよ。矢祭町って、茨城県の県境にある小さな村なんです。この矢祭の子どもたちが、子ども司書という制度をつくった。

どうなのかというと、ものすごく貧しい山間部の村なので、図書館を造ることも、本を買うこともできない。そこで、全国に「こんなところに住んでいたって、本を読みたい！」ってメッセージをネットで発信した。そうしたら、全国から 45 万冊集まっちゃったんです。

司会 ええっ、素晴らしい！

柳田 村では 30 人のボランティアがにわかづくりで司書の研修を受けて、図書館の整理とは何かというのをやった。司書の資格はなくても、その 45 万冊を 1 年がかりで整理した。建物なんかはとても造れないから、町にあったあんまり使っていない武道館の内装を全部変えて、本箱だけ買ってそこへ入れた。寄付ですから、ダブっているのがある。そのダブっているのは、プレハブの書庫を造ってそっちに置いた。全国から 5000 人の人が手紙付きで送ってきた。その感動を伝えようと。武道館を図書館にしてこっちに書庫、その間の渡り廊下を厚ガラスで造って、そこに 5000 人の名前と感謝の言葉を書いたんです。その「もったいない図書館」を拠点にして、子どもの読書活動とか絵本活動。私はその応援団をやっているんです。

その子ども司書。毎月1回、いろんな図書館業務の研修を受けて、毎年、十数人くらいずつに子ども司書という資格をあげるんですよ。その資格を持っている連中が勝手に集まって、自主的な活動（をしている）。原発のすぐそばの富岡町なんて、自分たちで企画して、埼玉県の小学校に十数人がマイクロバスで行った。もちろん学校が応援したんですけど、避難して不自由な勉強をしている富岡の子どもたちに、壇上で絵本の読み聞かせをやって交流している。

つまり、されるだけではなくて、自分ですることがものすごくその子の成長にも役立つし、子ども同士でする、されるという関係になると、されるほうも盛り上がってくるんです。いってこいの関係になる。子どものケアというすぐカウンセラーという考えではなくて、可能なことは何でもやっていく。そういう中で、地域の人、大人も、若者も、子どもも、できるだけそういうものが動くような呼び掛けや、機会や、チャンスや、そういう場をつくったりすることがとても大事じゃないのかなって。そういうノウハウは、例えば市の公民館なり、文化センターなりにNPOセンターみたいなものを置いておいて、そこで情報収集をしたり、呼び掛けたり。そういうことをやると、いろんな刺激になると思うんですね。

司会 いやあ、素晴らしいお話を伺いました。もう予定の時間を過ぎてしまいましたけれど、この機会に柳田先生に質問をという方はいらっしゃるのでしょうか。時間も限られておりますので、1つか2つだけでしたら会場からお受けできるかと思います。

大丈夫でしょうか。ありがとうございます。1周年を迎えて、これからまた一步踏み出すために、お力をいただけるようなお話を伺わせていただきました。

柳田 最後に1つ、エピソードを紹介させてください。これは災害と直接関係ないんですが、本質的には共通することだと思うんです。

東京の荒川区という下町のほうの区長さんが、子どもの読書活動や絵本活動にとっても熱心で、私、この5年間ずっと、その区の絵本推進のアドバイザーをやっているんです。その一つとして、「家で、親も子も絵本を読もう。そして、面白かった、感動したといったら、柳田さんに手紙を書こう」というのをやっているんです。「こんな本読んだよ」って、毎年、夏休みから秋口に掛けて、手紙を書く運動をやるんです。そうすると、子どもから600通から700通くらい来るんです。しかも、子どもがみんな、なぜかちゃんと原稿用紙に書いてくるんだよね。1年生か6年生まで。1年生なんかはたどたどしい字ですけど、素晴らしいんです。

その中の1つ、きょうご紹介したいと思ったのは、5年生の女の子です。こういうことを書いてくれました。書き出しがとっても愛くるしいんです。「柳田先生へ こんにちは」なんて始まるんです。だいたい学校で書かせる読書感想文っていうのは、堅苦しいじゃないですか。形だけ整えて、青年主張コントロールみたいなを書くでしょう。ああいうんじゃないくて、もっと気楽に書いてくれる。いい手紙が来るんです。これ、去年の秋口にいただいた5年生（のもの）。

どうなのかというと、彼女、▲タナカナユミさんっていうんです。愛犬ミルクが亡くなってしまって、毎日泣いてばかり。ご飯も食べられなくなった。おかあさんとの口数も少なくなりました。ところがね、そんな中で1冊の絵本に出会うんですよ。これは『わすれられないおくりもの』っていう、イギリスの絵本の翻訳なんです。いま、教科書にも出ている有名な本なんです。

この『わすれられないおくりもの』って何かというと、動物村の賢かったアナグマさんが、年老いて亡くなるんですね。「僕はトンネルの向こうに行くよ。さようなら」って書き置きをして、旅立ってしまうんです。村のキツネ君も、モグラ君も、カエル君も、みんな打ちひしがれて、悲しくて、寂しい、寂しい冬ごもりに入るんです。でも、春が来て、誰からともなく集まると、思い出話をするわけです。カエル君はスケートを教わって、フィギュアスケートが上手になった。キツネ君は、ネクタイの結び方を教わっておしゃれになった。モグラ君ははさみの使い方を教わって、紙切り細工ができるようになった。みんなでアナグマさんに教わったことや、もらったこと、楽しかったことを思い出して話しているうちに、いつの間にか心が温かくなった。（それで、）アナグマさんが側にいるような気になって、「アナグマさんありがとう」って空の雲に向かってお礼を言う。こういう絵本なんです。

これを読んで救われた子が、どれだけいるか。僕、いろんなお話をいただいているんです。たまたま去年いただいたこの5年生の女の子は、「ミルクは何にも悪いことしたことないのに、なんで死んじゃったの？ どこ行っちゃったの？」っていうんで、泣いてばかりいたのね。ところが、『わすれられないおくりもの』を読んで、「ものすごく心が揺さぶられた」って言うんです。「ただ、涙を流して悲しむだけじゃなくて、楽しかったこと、良かったこと、学んだこと、そんなことを思い出すと、ゆっくりとだけど気持ちが変わった」って。

こう書いています。「だんだん私もミルクとの楽しかったことを思い出し、そして親に話すうちに、何か自分の思いがミルクに届くような気になってきた」って。いままでご飯も食べられず、親ともしやべれなかった自分が、普通にしゃべれるようになる。悲しいことよりも、むしろ楽しい思い出。ミルクにもらった楽しい時間を思い出しているうちに、生きていたころ以上にミルクが好きになってきた。最後、こう結んでいるんです。「生き物の死は悲しいけれど、思い出を語り合うことで思い出が生き続けるし、自分の周りにもミルクの良さが伝わると思いました」って。

子どもってとってもナイーブで、素晴らしい感性を持っているなと思った。こんな死生観は、われわれが人生後半に入って直面する問題なんです。連れ合いを亡くすとか、親を亡くすとか。それを小学校5年生の子が、もうわかっちゃうんですね。すごいことだと思いました。絵本の力ってすごいなって。

似たような体験が、ほかにもあるんです。ほかの子の便りの中には、「思い出が心の中に生きていて、それが自分の人生を膨らませてくれる」とまで書いているんですよ。そういうことはすぐに思うことはできないんだけど、どこか頭の片隅に……。思い出を語る。楽しかったり、自分自身がいま生きていることを支えてくれた誰かの思い出。そういうものを絶えず、繰り返しかみしめるように思い出すと、亡くなった人が自分の中で生きている。その思いを大事にして生きることが、とても大事なことになるだろうなって。そういうことを語っていると思うんですね。

ちょっとご紹介させていただきました。

司会 ありがとうございます。言葉がないです。

きょうは2時間と少しの時間でしたけれども、皆様のお気持ちに残るお話をさせていただけたのではないかなというふうに思います。柳田さん、きょうは本当にありがとうございます。大きな拍手を……。

(拍手)

ありがとうございました。

予定の時間をだいぶ過ぎてしまいましたけれども、きょうはご参加いただいて、意義を感じてくださ

った方が多いのではないかと思います。皆様、長時間にわたりお付き合いいただきまして、本当にありがとうございました。

このイベントの様子は、3月11日、まさに震災から1周年に当たる日曜日の夜8時から、エフエム仙台 Date fm で、特別番組として55分間に凝縮して放送させていただきます。きょうお越しいただいた方はもちろんですが、お越しになれなかった方々にもぜひお聞きいただくようにお勧めいただければ幸いです。

そして最後に、きょうのご感想などをお書きいただくアンケートのほうにもご協力をお願いいたします。

それでは、(震災から)1年になります。復興の道のりは、これから先が本当に長いかと思います。皆様、お気持ちを強く持ち、お体にも気をつけて、このあとも頑張っていきましょう。本日は長い時間、どうもありがとうございました。

(拍手、終了)